

‘丹波黒’ エダマメ栽培における移植遅延した場合の摘心したセル苗の利用

～摘心したセル苗で移植期を延長～

摘心して7日長く育てたセル苗を移植すると、収量は慣行と同等となりました。22日長く育てたセル苗であっても、マルチングした畝に栽植密度を上げて移植すると収量は慣行と同等となりました。

1. 背景と目的

大和高原地域での‘丹波黒’のエダマメの播種時期は6月10日から20日とされています。移植適期は播種12～15日後で、初生葉が展開し本葉がわずかに見え始めた頃です。降雨等により適期に移植できなかった場合には、草丈が伸びすぎて移植作業が煩雑になります。

そこで、適期に移植できなかった場合の対応として、摘心したセル苗の利用を試みました。

収穫時の莢数と莢重量は、慣行(13日育苗)区と比べて20日育苗区では同程度となり、35日育苗区では少なくなりました(表2)。35日育苗・密植区では、慣行区と同程度となりました。

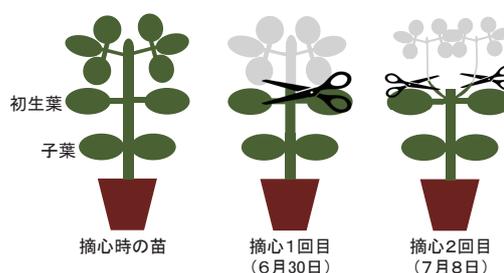


図1 苗の摘心方法

2. 研究成果の概要

試験は、大和野菜研究センター(宇陀市、標高約350m)で行いました。6月15日に128穴セルトレイに播種し、1回摘心して7日長く育苗した20日育苗区、2回摘心して22日長く育苗した35日育苗区および2回摘心して22日長く育苗し2条植えで密植した35日育苗・密植区を設定しました(表1)。35日育苗・密植区は、2条植えで土寄せができないので、雑草を抑えるために白色ポリフィルムでマルチングをしました。また、苗の摘心方法は図1のとおりとしました。

3. 実用化に向けた対応

摘心したセル苗を利用すると移植期を7日延長できることが示されました。また、余剰苗があり、栽培面積に限られる場合には、マルチングした畝に密植することで、移植期遅延による収量減を緩和できると考えられました。今後は、播種時期の再検討を行い、大和高原地域における‘丹波黒’エダマメの安定生産に貢献したいと考えています。

(大和野菜研究センター 峯圭司)

表1 試験区の設定(2022年)

試験区	摘心回数	移植日	マルチング	植え付け条数	栽植密度(本/a)
20日育苗	1	7月5日	無	1条	133
35日育苗	2	7月20日	無	1条	133
35日育苗・密植	2	7月20日	有	2条	267
慣行(13日育苗)	無	6月28日	無	1条	133

表2 各試験区の収量

試験区	莢数(莢/a)	莢重量(kg/a)
20日育苗	22,920	88
35日育苗	9,964	39
35日育苗・密植	21,827	83
慣行(13日育苗)	21,547	85

奈良県農業研究開発センター
ニュース vol. 166

2024年6月30日発行

編集発行 奈良県農業研究開発センター
TEL 0744-47-4491(代)
FAX 0744-47-4851
URL <https://www.pref.nara.jp/1761.htm>
印刷 株式会社春日